

書翰から見る王羲之像

—逸民の生活を中心に—

佐藤利行・劉金鵬

【キーワード】王羲之、書翰、晋朝、隠逸、人間像

一 はじめに

「書聖」として有名な東晋の王羲之（三〇三～三六一）の書は、後世、書の手本として珍重されてきた。いわゆる法帖として多くのものが今日に伝えられている。そのうち例えば「十七帖」は、二十条の羲之の書翰を収めたもので、初めが「十七日、先書」で書き出されているので「十七帖」と呼ばれている。今、冒頭の書翰の内容を見てみよう。（注①）

すなわち、「十七日、先にお手紙を出しましたが、郗司馬はまだ出発しておりません。（手紙を出した）その日に、あなたの手紙を受け取り、喜んでおります。先の書に詳しく述べましたので。以上、ご連絡まで」という内容のものである。（ここに見える「郗司馬」とは郗曇（三二〇～三六一）のこと）で、羲之の妻の弟に当たる。郗曇の娘は羲之の子の王獻之の妻となつた。

咸康六年（三四〇）、羲之三十八歳の時、郗司馬（曇）は司馬昱（簡文帝）が撫軍將軍となつた時に、その司馬となつた。ついで尚書吏部郎に除せられ、御史中丞を拝した。従つて此の書翰は、曇が司馬になつた、咸康六年頃に書かれたものであると思われる。（注②）

このように、今日までに残された王羲之の書翰は合わせて七百条に近い数のものがあり、これは王羲之研究にとって非常に貴重な資料である。しかし、羲之の書翰は、もともと公開されることを前提にされていなかつた、言い換えれば公開されることを前提とした

十七日、先書。郗司馬未去。即日得足下書、為慰。先書以具。
示復數字。
（『右軍』一・『二王』中九）

十七日、先に書す。郗司馬は未だ去らず。即日、足下の書を得て、慰めと為す。先の書に以て具はる。復た数字を示すのみ。

中国文学の伝統的な文学形式である「書」とは、全く異質の極めて私的なものであるため、その内容を把握することが甚だ難しいものであった。

例えば、書翰に見られる多くの語彙は、いわゆる当時の口語と思われるもので、その意味の把握は難しい。また、文法的にもやはり口語の影響を受けたと想像されるものが多く用いられている。（注③）更に殆どの書翰は、ごく親しい人に宛てたものであり、言わば今日我々が携帯でメールをするが如き感覚で書かれているようである。今、一二三の例を見てみよう。

太尉門左、不可言、同此酸慨。

（『王右軍集』一）

太尉の門左、言ふ可からず、此の酸慨を^{とも}せん。

「太尉の家の人々や部下は、口では言えないほど、この痛ましい思いをともにしていることでしょう」という内容の僅か十一字のこの書翰は、先に見た「十七帖」冒頭の書翰と同様に、王家との関わりの深い郗鑒（郗曇の父）についてのものと思われる。というのも書翰の「太尉」とは三公の一である軍の長官であり、『晋書』卷六七「郗鑒伝」には、郗鑒が劉徽の率いる賊軍を討ち、位を太尉に進められたという記述が見えるからである。

また、次のような書翰もある。

桓安西、觀自伐蜀^う。《右軍》四二〇）

桓安西は、自ら蜀を伐つを觀すこと五たびなり。

すなわち「桓安西は、自分で蜀を伐つのだと、五回も言つております」という内容であるが、ここに「桓安西」とは、やはり羲之とは関わりの深い桓温（三二二～三七三）のことと思われる。『晋書』卷九八「桓温伝」に拠れば、桓温は庾翼が亡くなつた永和元年（三四五）に、安西將軍となり、永和二年十一月に、征虜將軍周撫らを率いて後蜀を伐つてゐる。

このように、書翰の内容を手掛かりとして書かれた時期がおおよそ推測できるものは、二百条ほどである。拙著『王羲之全書翰』の「まえがき」で、次のように書いた。（注④）

もし時期の推定できるものを年代順に排列することができれば、それはとりもなおさず、本人（王羲之）自身の筆によつて記された生涯の記録であり、動乱の時代を生きた一貴族の個体史ということになろう。そうしてそれはまた、個人の生活記録というだけのものではなく、当時の社会をありのままにえがいたものもあるから、東晋という時代と社会の、生の記録ということにもなる。

以下、本稿では羲之の書翰を主な資料として、『晋書』や『世說新語』等の資料からだけでは窺い知ることのできないであろう王羲之像について、特に逸民の時期を中心に、見てみたい。

二 王羲之の書翰

本稿では王羲之の書翰を主な資料として、王羲之とはいがなる人物であったのか、その人間像を見て行くのであるが、そもそも七百条にも及ぶ膨大な書翰が、なぜ今日まで残ったのであろうか。

そのことを物語る逸話が『晋書』卷八十「王羲之伝」に記されている。すなわち『晋書』本伝には、羲之の書が生存中から珍重されていたことを示す次のような逸話が残されている。

又山陰有一道士、養好鶩。羲之往觀焉、意甚悅、固求市之。道士云、「為写道德經、當拳群相贈耳」。羲之欣然寫畢、籠鶩而歸、甚以為榮。其任率如此。

又た山陰に一道士有り、好鶩を養ふ。羲之往きて焉を観、意甚だ悦び、固く之を市らんことを求む。道士云ふ、「為に道徳經を写さば、当に群を挙げて相贈るべきのみ」と。羲之は欣然として写し畢り、鶩を籠にして帰り、甚だ以て楽しみと為す。其の任率なること此の如し。

すなわち、「また、山陰に一人の道士がいて、好い鶩鳥を飼っていた。羲之は出かけて行つてそれを見、たいそう気に入り、どうしても売つてほしいと頼んだ。すると道士は、「老子の『道徳經』を写してくださいなら、この鶩鳥を全て差し上げます」と言った。羲之は大喜びでそれを写し終え、鶩鳥を籠に入れて帰つて、大変それを楽しんだ。およそ彼の任率（思いのままにふるまうこと）ぶりは、このようであった」というものである。羲之が鶩鳥を愛好していることは『晋書』にも他に記載があるが、ここでは道士が鶩鳥の対価として羲之の書を欲しがつたということで、羲之の書は生前からすでに高い評価を得ていたということが分かる。

また、次のような記載もある。

嘗詣門生家、見棐几滑淨、因書之、真草相半。後為其父誤刮去之、門生驚懊者累日。

嘗て門生の家に詣り、棐の几の滑淨なるを見、因りて之に書し、真草相半ばす。後、其の父の為に誤りて之を刮り去られ、門生の驚懊する者、累日なり。

かつて門人の家に行き、棐の木の机の滑らかなのを見て、それに字を書いたが、真書と草書とが相半ばしていた。後にその父が誤つて（その字を）削り去つてしまつた。門人は何日もふさぎこんでいること此の如し。

た」というものであるが、ここからも羲之の書が高く評価されていることが分かる。更に、次のような事も記されている。

上方寛博多通、資生有十倍之。覺是所委息。乃有南眷情。足下謂何以。密示。一勿宣此意。為與卿共思之。省已、以付火。

又嘗在蕺山、見一老姥、持六角竹扇賣之。羲之書其扇、各為五字。姥初有愠色。因謂姥曰、「但言、是王右軍書。以求百錢邪」。

姥如其言。人競買之。

又た嘗て蕺山に在りて、一老姥の、六角の竹扇を持ちて之を売るを見る。羲之は其の扇に書いて、各おの五字を為す。姥は初め懼る色有り。因りて姥に謂ひて曰く、「但だ言へ、是れ王右軍の書と。以て百錢を求めんか」と。姥、其の言の如くするに、人競ひて之を買ふ。

「あちらは土地が広く、物資の流通も頻繁で、利益はここのは十倍もあります。ここが落ち着き場所ではないかと思います。そのため南の方へ移ろうとする気持ちがあります。あなたはどう思われますか。こつそりお話ししているのですから、決して口外なさらないよう。あなたと二人だけで相談したいと思うからです。ご覧になつたら、燃やして下さい」という内容の書翰であるが、一家の長としての王羲之は、王家を支えるための経済についても心を配つていたようである。

これら『晋書』本伝に記載されている逸話を見れば、羲之の書は当時から甚だ重んじられていたことが十分に理解できる。今日の我々が、有名人や高名な人の書いたものを珍重するのと同じである。

こうして恐らく羲之から書をもらつた人は、それを大切にしてい

いうことは、やはり受け取った人が羲の書の価値を認め、燃やすことが出来なかつたのではなかろうか。

このようにして、七百条にも及ぶ王羲之の書翰は大切にされ、我々はその内容を知ることができることとなつたのである。

三 服食養生

『世説新語』言語篇に、

何平叔云、服五石散、非唯治病、亦覺神明開朗。

何平叔云ふ、五石散を服すれば、^{なま}唯に病を治するのみに非ず、亦た神明開朗なるを覺ゆ、と。

と見えるように、魏の何晏（字は平叔）以来、魏・晋の貴族の間では「五石散」が流行した。（注⑤）この五石散に関する羲の次のような書翰がある。

服足下五色石膏散、身輕、行動如飛也。足下更与下七、致之不。治多少、尋面言之。委曲之事、實亦□人。尋過江言散。

（『王右軍集』一二）

追尋しては傷悼し、但だ痛心有るのみ。^{はいかん}當た奈何せん奈何せん。告を得て之を慰む。吾は昨頻りに哀感し、便ち自ら勝^たたへざらん

足下の五色石膏散を服するに、身は軽くして、行動は飛ぶが如きなり。足下は更に七を与下へて、之を致すや不^{いな}や。治の多少は、^つ尋いで面して之を言はん。委曲の事、實に亦た人を□。尋いで江を過ぐれば言散せん。

すなわち、「あなたからいたただいた五色石膏散を服用したところ、身は軽くなり、行動はまるで空を飛んでいるかのようです。あなたはさらに七服分を分けて下さり、送つていただけませんか。治癒の状況については、またお会いしてお話しいたしましょう。詳しい事は、また人を（やります）。そのうちに（彼が）江を渡れば気晴らしをしましよう」という内容の手紙から、羲自身も五石散を服用していたことが分かる。

この書翰の内容と関連するものとして、次のようなものもある。

追尋傷悼、但有痛心。當奈何奈何。得告慰之。吾昨頻哀感、便欲不自勝拳。旦服散行之、益頓乏。推理皆如足下所誇。然吾老矣。余願未尽、唯在子輩耳。一旦哭之。垂尽之年、転無復理。此当何益。冀小却漸消散耳。省卿書、但有酸塞。足下念故言散、所豁多也。王羲之頓首。　（『右軍』一九三・『淳化』三）

と欲す。一旦に服散して之を行ふも、益ます頓乏す。理を推すに皆な足下の誘ふる所の如し。然れども吾は老いたり。余願の未だ尽くさざるは、唯だ子輩に在る耳。一旦之を哭す。垂尽の年、転た復する理無からんとす。此れ當た何の益あらん。小却か漸く消散せんことを冀ふ耳。卿の書を省るに、但だ酸塞有るのみ。足下言散して、豁くする所の多からんことを念故せよ。王羲之頓首。

「思い起こしては悲しみ、ただ心が痛むばかりです。一体どうすればよいのか。お手紙をいただいてこころが慰みました。私は昨日、悲しくてたまらなくなり、とても我慢することなどできませんでした。朝になつて服散したのですが、ますます元気がなくなつてしましました。そのわけを考えてみますに、すべてあなたのお考えの通りです。ところで私は年老いてしまいました。心に残つてることには、ただ子供たちのことだけです。ところが、にわかにその死を哭することになろうとは。残りわずかな年齢になり、とても病氣が治る望みもありません。服薬していつたい何の益があるのかと思ひます。しかし、少しずつでも薬を飲んで治したいと願つてているわけです。あなたのお手紙を見ては、ただ悲しみに胸がふさがるばかりです。あなたは気を晴らして大きな気持ちでいるようにして下さい」。

ここに見える「服散」も、或いは五石散を服用することであろうか。いずれにせよ羲之はこうした服薬によつて、塞いだ気持ちを晴らすようにしていたのであろう。

これらの書翰以外にも、多くの薬方に関する書翰が残されている。

先生頃可耳。今日略至。遲委悉。知樂公可為之慰。桃膠易得、可以少耶。專一物不移、乃不忠也。充迎不。致意。知陽意事進。願人之善。

（右軍）三一九

先生は頃ろ可なる耳。今日、略ば至らん。委悉を遅つ。樂公の之が為に慰む可きを知る。桃膠は得易きも、以て少しくす可き耶。一物を専らにして移さざるは、乃ち忠ならざる也。充は迎ふるや不や。意を致せよ。陽の意、進むを事とするを知る。人の善くせんことを願ふ。

「先生は近ごろ元氣にしています。今日ぐらいには（そちらに）着くでしょう。詳しい知らせを待つております。樂公も先生に会つて安心することと想います。桃膠は手に入れやすいものですが、（使う量は）少なくすべきでしよう。一つの物ばかりを用い続けるのは、よくないと思います。充は迎えてくれますか。お知らせ下さい。陽が仕進する気になつていることを知りました。みんながよくしてくれることを願つております」。

書き出しの「先生」とは、道士の許邁のことである。王家では、もともと張氏の五斗米道（後の道教）を信奉していた。殊に羲之の次男の凝之は、狂信的な信者であり、鬼兵の援助を当てにして賊に

対する備えをせず、賊に攻められて殺されてしまったということが、『晋書』王羲之伝に、次のように記されている。

有七子、知名者五人。玄之早卒。次凝之、亦工草隸、仕歴江州刺史、左將軍、会稽内史。王氏世事張氏五斗米道、凝之彌篤。

孫恩之攻会稽、僚佐請為之備。凝之不從、方入靖室請禱、出語諸將佐曰、「吾已請大道、許鬼兵相助。賊自破矣。」既不設備、遂為孫恩所害。

七子有り、名を知らるる者五人。玄之は早く卒す。次は凝之、亦た草隸に工みなり。仕へて江州刺史、左將軍、会稽内史を歴たり。王氏は世よ張氏の五斗米道に事へ、凝之は彌^{いよいよ}篤し。孫恩の会稽を攻むるや、僚左は之が備へを為さんことを請ふ。凝之は従はず。方に靖室に入りて請禱し、出でて諸将佐に語りて曰く、「吾は已に大道に請ふに、鬼兵も^{あひ}相助くるを許す。賊は自ら破れん」と。既に備へを設けず、遂に孫恩の害する所と為る。

「七人の子があり、名の知れた者は五人であった。玄之は早く亡くなつた。次男の凝之は、また草書・隸書に巧みであった。仕官して江州刺史、左將軍、会稽内史を歴任した。王氏は代々、張氏の五斗米道を信じていたが、凝之はとりわけ信仰が篤かつた。孫恩が会稽を攻めた時、部下が防備をするように願つたところ、凝之はそれ

に従わず、靖室に入つて祈禱をし、おわつて部屋から出でてくると、將軍や属官にむかつて言つた、「私が神にお願いをして、鬼兵が助けてくれることになつたから、賊はおのずから破れるはずだ」と。こうして防備をしなかつたので、孫恩のために殺されてしまつた」というものである。

ところで許邁については、『晋書』王羲之伝にその略伝が付されている。

始羲之所与共游者、許邁。字叔玄、一名映。丹陽句容人也。

始め羲之の^{とも}與共に遊びし所の者に、許邁あり。字は叔玄、一名は映。丹陽・句容の人なり。

と書き出される略伝では、許邁と羲之との関わりについて、次のように記述している。

初採藥於桐廬縣之桓山、餌虎涉三年。時欲斷穀、以此山近人、不得專一、四面藩之。好道之徒、欲相見者、登樓^う予語、以此為樂。常服氣、一氣十余息。永和二年、移入臨安西山、登巖茹芝、眇爾自得、有終焉之志。乃改名玄、字遠游、與婦書告別、又著詩十二首、論神遷之事焉。羲之造之、未嘗不彌日忘歸、相與為世外之交。玄遺羲之書云、「自山陰南至臨安、多有金堂玉室、仙

人芝草。左元放之徒、漢末諸得道者、皆在焉。」義之自為之傳、述靈異之跡甚多、不可詳記。玄自後、莫測所終。好道者、皆謂之羽化矣。

初め、薬を桐廬県の桓山に採り、朮を餌ひて三年を涉る。時に穀を断たんと欲するも、此の山の、人に近くして、專一するを得ざるを以て、四面に之に藩す。道を好むの徒、相見んと欲する者あらば、樓に登りて与に語り、此れを以て楽しみと為す。常に氣を服し、一氣もて千余息す。永和二年、移りて臨安の西山に入り、巖に登り芝を茹ひ、眇爾として自得し、終焉の志有り。乃ち名を玄、字を遠游と改め、婦に書を与へて別れを告げ、又た詩十二首を著し、神遷の事を論ず。義之の之に造るや、未だ嘗て日に彌りて帰るを忘れずんばあらず、相与に世外の交りを為す。玄は義之に書を遺して云ふ、「山陰の南より臨安に至るまで、多く金堂玉室、仙人芝草有り。左元放の徒、漢末の諸もろの得道者は、皆な焉に在り」と。義之は自ら之が伝を為り、靈異の跡を述ぶること甚だ多し。詳かに記す可からず。玄は自後、終る所を測る莫なし。道を好む者は、皆な之を羽化せりと謂ふ。

すなわち「初め、桐廬県の桓山で薬を採ったときは、朮を食べて三年を過ごした。そのころ、穀物を絶とうと思つたが、この山が人家に近く、それに専念することができないので、四方に藩を作つた。

噉豆、鼠傷如佳。今送。能噉不。

（『淳化』三・『二王』上五五）

道家の徒で、彼に会いたい者は、樓に登つて話をし、それを楽しみとした。常に氣を服し、一呼吸で千余回の呼吸に相当した。永和二年、臨安の西山に移り、岩に登つて靈芝を食べて、はるかに仙道を自得し、この地で生涯を終える決心をした。そこで、名を玄、字を遠游と改め、妻に手紙を書いて別れを告げ、また詩十二首を作り、神仙の事を論じた。義之がここに来ると、何日も帰るのを忘れなかつたことはなく、互いに世外の交わりを結んだ。玄は義之に手紙を遺して、「山陰の南から臨安にかけて、金堂玉室や仙人芝草が多くあり、左元放の徒ら、漢末の諸々の得道者が、皆ここにいる」と言つた。義之は自ら彼の伝記をつくり、数々の靈異の事跡を述べたが、ここに詳しく述べることはできない。玄はその後、どこで終わつたか分からぬ。この道を好む人たちは、彼は羽化昇天したのだと考えた」というものである。

許邁との出会いが何時のことであつたかは不明であるが、恐らく義之が会稽の地にやつて来てからのことであろう。

こうした許邁との交わりを通して、義之は服食養生に努めることになる。義之の書翰の中には、以下のような薬方に関するものが多く残されている。

豆を噉へば、鼠傷に効くようです。今、送る。能く噉ふや不^{いな}。

須狼毒。市求不可得。足下或有者、分三両。停須。故示。

『淳化』五・『二王』上五一

「豆を食べれば、鼠傷に効くようです。今、お送りします。食べられますか」という内容であるが、恐らく鼠にかじられた傷を治すのに効果のある豆を羲之が教えているのであろう。

石脾、入水即乾、出水便湿。独活、有風不動、無風自搖。天下物理、豈可以意求。唯上聖乃能窮理。 (『二王』中三四)

石脾は、水に入れれば即ち乾き、水より出だせば便ち湿る。独活は、風有るも動かず、風無きも自ら搖く。天下の物理、豈に意を以て求む可けんや。唯だ上聖のみ乃ち能く理を窮む。

「狼毒が必要です。市場で搜したのですが手に入れることができませんでした。あなたがもしお持ちでしたら、三両ほどお分け下さい。(こちらに)ずっと停まって待つておりますので。それでお便りした次第です」というものである。「狼毒」は、『本草綱目』草部に「聾を治す」とあることから、恐らく羲之の所に聾を患っている人がいて、薬を待つてているのであろう。(注⑥)

このように、王羲之は親しい人たちと薬方の情報を作成し、ともに服食養生に努めていたと思われる。

「石脾は、水に入れると乾き、水から出すと湿ります。独活は、風が吹いても動かないが、風が無くても搖れ動きます。天下の物の理は、どうして人の心で推し量ることができましようか。ただ聖人のみが理を窮めることができるのです」。ここにある「石脾」は、『本草綱目』石部に「石脾は西戎の歛地に生じ、碱水の結成する者なり」とあり、「獨活」(うどの一種)については、『本草綱目』草部に「諸々の中風・湿冷を治す」とある。これも羲之が薬方について手紙の相手に説明をしているものである。

四 目前の娛しみ

こうした日々にあって、羲之の心を慰めてくれていたのは、可愛い孫たちであった。羲之には次のような書翰がある。

吾有七兒一女。皆同生。婚娶以畢、惟一小者、尚未婚耳。過此一婚、便得至彼。今内外孫有十六人、足慰目前。足下情致委曲。

狼毒を須む。市に求むるもの得可からず。足下、或いは有ら者、三両を分かてよ。停まりて須つ。故に示す。

故具示。

(『右軍』二〇・『淳化』三・『三王』上一〇)

るに足らん。……

吾に七児一女有り。皆な同生なり。婚娶は以に畢るも、惟だ一小者のみ、尚ほ未だ婚せざる耳。此の一婚を過ぐれば、便ち彼に至るを得ん。今、内外の孫十六人有り、目前を慰むるに足る。足下情致は委曲なり。故に具に示す。

「私には七人の男の子と一人の女の子がおります。みな同じ腹から生まれたものです。結婚はほぼおわったのですが、ただ末の一人だけが、まだ結婚していません。この子の結婚がすめば、あちらに行くことができるでしょう。今、内孫外孫が十六人おり、今を楽しませてくれます。あなたのお心づくしに感謝しつつ、お便りしました」というように、羲之にとって可愛い孫たちは今この時を楽しませてくれるかけがえのない存在であった。

「足慰目前」（目前を慰むるに足る）というのは、羲之の考え方の一端を示す言葉で、次の書翰にも見ることができる。

十月七日、羲之報ず。前過足下、所得其書、想殊有勞弊。然叔兄子孫有数人、足慰目前情。……（『淳化』四・『三王』中四七）

十月七日、羲之報ず。前に足下に過りて、得る所の其の書、想ふに殊に勞弊有り。然れども叔兄は子孫數人有り、目前の情を慰む

「十月七日、羲之報ず。以前、あなたの所に立ち寄つて受け取つた、先方からの手紙によれば、ことに苦労が多いように思われます。しかし叔兄には子や孫が数人あり、目前の情を慰めるのには十分でしょう。……」

次の書翰にも「媿目前」（目前を媿しむ）と見えている。

古之辭世者、或被髮佯狂、或汚身穢迹。可謂艱矣。今僕坐而獲免、遂其宿心。其為幸慶、豈非天賜。違天不祥。頃東遊還。修治桑果、今盛敷榮。率諸子、抱孫、遊觀其間。有一味之甘、割而分之、以媿目前。雖植德無殊邈、猶欲教養子孫、以敦厚退讓、戒以輕薄。庶令舉策數馬、彷彿萬石之風。君謂之何如。遇重熙去。當與安石、東遊山海、併行田、盡地利。願養閒暇、衣食之余、欲與親知、時共歡讌。雖不能興言高詠、銜杯引滿、語田里所行、故以為撫掌之資。其為得意、可勝言耶。常依陸賈班嗣楊王孫之處世、甚欲希風數子。老夫志願、盡於此也。君察此。當有二言不。真所謂賢者志於大、不肖志其小。無緣見君。故悉心而言、以當一面。

(『右軍』三一五)

古の世を辞する者は、或いは被髮佯狂し、或いは身を汚し迹を穢す。艱しと謂ふ可し。今、僕は坐ながらにして免るるを獲、其の

宿心を遂ぐ。其の幸慶為るや、豈に天賜に非ずや。天に違へば不祥なり。頃る東遊して還る。桑果を修治し、今、盛んに栄を敷く。諸子を率ゐ、孫を抱き、其の間に遊観す。一味の甘き有らば、割きて之を分ち、以て目前を娛しむ。徳を植つること殊に邈^{はる}かなること無しと雖も、猶ほ子孫を教養するに、敦厚退讓を以てし、戒むるに輕薄を以てせんと欲す。庶^{ねが}はくは策^{むち}を挙げて馬を数へ、萬石の風に彷彿たら令めんことを。君、之を謂ふこと何如。遇々重熙去る。當に安石と、東のかた山海に遊び、併せて田を行なひ、地の利を盡くすべし。頤養の間暇、衣食之余、親知と、時に歛談^{くわうだん}を共にせんと欲す。言を興して高詠し、杯を衡んで満を引くこと能はずと雖も、田里の行なふ所を語るに、故より以て撫掌^{ぶとう}の資と為す。其の得意為ること、勝げて言ふ可けん耶。常に陸賈・班嗣・楊王孫の處世に依り、甚だ風^{かう}を數子に希^{ねが}はんと欲す。老夫の志願、此に盡くる也。君、此を察せよ。當た二言有るや不や。真に所謂、賢者は大を志り、不肖は其の小を志るなり。君に見ふに縁無し。故に心を悉^{つく}して言ひ、以て一面に當てん。

「古の俗世に別れを告げた者は、髪をふり乱して狂人をよそおつたり、わが身やわが行ないを汚^{けが}したりしました。これはなかなか出来ることではありません。ところが今、私はいながらにして俗世から逃れることができ、かねてからの懐いを遂げました。この慶びは、天からの賜り物ではないでしようか。天命に逆^{さか}ることは不吉です。

さて、近ごろ東の方を遊覧して帰りました。桑の木を植えておいたのが、今やりっぱに育っています。子供たちを引き連れ、孫たちを抱きかかえては、その間をながめまわっております。何かうまいものが有れば、みんなでそれを分けあつて、この目前を楽しんでおります。私はとりわけすぐれた徳はありませんが、それでも子や孫たちに敦厚と退讓を教え、軽薄を戒めるようにしております。できますならば、策を手にしていちいち馬を数えたという万石君の家風にならいたいと願つております。あなたはこのことをどのように思われますか。たまたま重熙^{じゆき}が（西に）行きましたので、安石と東方の山海を遊覧し、ついでに莊園を見てまわり、田をちゃんと作らせるようによろしく思います。養生のひまができ、生活の余裕ができたならば、親戚の者や知人たちと一緒に歛談したいと思つております。立派な言葉を述べ、高らかに歌いあげ、盃をふくんで飲みほしたりすることはできなくとも、田舎でのくらしを語り合えば、手を撫つて談笑する種^{たね}にはなるでしょう。その満ち足りた気持ちは、とても言いつくせないでしよう。いつも陸賈や班嗣・楊王孫の處世術を参考にし、これらの人たちの風にならいたいと望んでおります。老いぼれの私の願いは、ただこれだけです。あなたもお察し下さい。心にもないことは言つてはおりません。本当に、所謂る「賢者はその大きなところを知つており、不賢者はその小さなところを知つておる」というものです。あなたにお目にかかるすべがありません。それで心のたけを述べ尽くし、拝眉に代える次第です。」

この書翰は、『晉書』本伝にも、「吏部郎謝万に書を与えて曰く」として載せてある。書翰の中で、「諸子を率ゐ、孫を抱き、其の間に遊観す」というように老年を迎えた羲之にとつては、家族と過ごす時間は何より楽しいものであつた。特に幼い孫たちは羲之にとつて、かけがえのない存在であつた。

五 孫の夭折

しかし、その可愛い孫が夭折するという、この上もない悲しい出来事に羲之は見舞われる。

官奴小女玉潤、病來十余日、了不令民知。昨來忽發痼、至今転篤。又苦頭癱、頭癱以潰、尚不足憂。痼病少有差者、憂之憔心、良不可言。頃者、難疾未之有。良由民為家長、不能剋己勸修、訓化上下、多犯科識、以至於此。民惟帰誠待罪而已。此非復常言常辭。想官奴辭以具。不復多白。上負道德、下愧先生。夫復何言。

（二王）上一八

官奴の小女玉潤は、病み來たりて十余日なるに、了く民をして知ら令めず。昨來、忽ち痼を発し、今に至りて転た篤し。又た頭癱に苦しむも、頭癱は以に潰れ、尚ほ憂ふるに足らず。痼病は少しく差ゆる者有るも、之を憂ひて心を焦ましむること、良に言ふ可

からず。頃者、難疾は未だ之れ有らず。良に民は家長と為るも、已に剋ちて懲め修め、上下を訓化する能はずして、科識を犯すこと多きに由りて、以て此に至るなり。民は惟だ誠に帰して罪を待つ而已。此れ復た常言常辭に非ず。想ふに官奴辭げて以て具にせん。復た多くは白さず。上は道德に負き、下は先生に愧づ。夫れ復た何をか言はん。

「官奴の少女の玉潤が、病気になつてから十数日になりますのに、

私は全く知らせがありませんでした。昨日から突然に持病が悪くなり、今はいよいよひどくなつております。その上、頭のできものに苦しんでおりましたが、できものは已につぶれてしまい、もはや心配するには及びません。持病も少しはよくなつてはいたのですが、やはり心配で落ち着かず、本当に口では言えぬほどでした。近頃、こんなにもやつかいな病氣は見たことがありません。これもまたに私が家長であるながら、我が身をつしみ修養して、家族の者たちを訓化することができず、誠めを犯すことが多かつたから、このようなことになつてしまつたのです。私はただただ誠心誠意、罪を待つだけです。これは口先だけで言つてはいるのではありません。官奴がすでに詳しく述べて思つてはいると思いますので、もう多くは申しません。上は道德にそむき、下は先生に愧ずるばかりです。もう何も申せません」という内容の手紙であるが、「官奴」すなわち王羲之の娘の玉潤が治療を受けていた道士の先生に宛てたものである

う。幼い孫娘の死に遭遇して、義之の悲しみはいかばかりであったろうか。

延期・官奴小女、並得暴疾、遂至不救。愍痛貫心。奈何。吾以西夕、至情所寄、唯在此等、以榮慰余年。何意、旬日之中、二孫夭命。旦夕左右、事在心目。痛之纏心、無復一至於此。可復如何。臨紙咽塞。

(『右軍』一七二)

延期・官奴の小女は、並びに暴疾を得て、遂に救はれざるに至る。愍痛は心を貫く。奈何せん。吾は西夕を以て、至情の寄す所は、唯だ此れ等に在り、以て余年を榮慰せんとす。何ぞ意はんや、旬日の中、二孫の天命せんとは。旦夕左右、事は心目に在り。痛みの心に纏るや、復た一に此に至る無し。復た如何にす可き。紙に臨んで咽塞す。

延期・官奴の幼い娘は、どちらも急に病氣になり、そのまま命を救うことができませんでした。この痛む心はどうすることもできません。私は残り少ない歳になり、ただこれらの孫たちが楽しみで、余年を慰めようと思つております。旬日の中に、二人の孫娘が幼くして亡くなつてしまおうとは、思つてもみませんでした。いつでもどこでも、そのことばかり思い出されます。痛みが心にまつわりつく」と、これ以上のものはありません。一体どうすればいい

いのでしょう。この手紙を前にして、咽び泣くばかりです」冒頭の「延期」とは、王延期のことと、義之の兄の籍之の子である。(注⑦)こうした身内の、それも幼い孫娘が死んでいくという悲しみを経験し、義之はよりいつそう今この時を充実して生きて行こうという思いが強くなつていったと想像される。

六 まとめ

今回は、王羲之の書翰を中心として、「服食養生」「目前の嬉しみ」「孫の夭折」という観点から、その人間像を考察した。書翰は義之みずからが書いたものであるから、当然のことながら、そこに書かれたことは義之の心の想いであつたに違いない。しかし、「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」(『易經』)というように言葉で表現された、その中にある真意を読み取ることは相当に難しい。多く残された義之の書翰を相互に関連付けて考え合わせることによつて、少しでも義之の心の想いに迫ることが可能となる。

また、王羲之を研究するためには、『晋書』『三国志』およびその注、『世說新語』およびその注、『真誥』などの資料があるが、こうした資料と義之みずから手になる書翰との関連付けを丁寧にすることによって、より詳しく王羲之人間像が浮き彫りにされるはずである。今後、更に眞の王羲之像に迫るべく考察を重ねたい。

【注】

①本稿で取り上げる書翰については、唐・張彥遠輯『右軍書記』（津逮秘書本『法書要錄』所収）、清・乾隆三十四年勅輯『淳化閣帖』（広雅書局刊『武英殿聚珍版』所収）、宋・許開撰『王帖評釈』（横山草堂叢書）所収）、明・張溥輯『王右軍集』（『漢魏六朝一百三家集』所収）を用いた。

②書翰がいつ頃書かれたものであるのかについては、その内容によつて推測することが可能である。詳しくは佐藤利行「王羲之書翰繫年考証」（『国文学論集』安田女子大学、第一四巻、一九八六年）を参照。

③佐藤利行「王羲之書翰の語彙」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六九巻、二〇〇九年）、佐藤利行「六朝漢語の研究」（『安田女子大学紀要』第一四巻、一九八五年）を参照。

④森野繁夫・佐藤利行『増補改訂版王羲之全書翰』（白帝社、一九九六年）では、書かれた時期の推測できる二百三条を、

一 会稽内史になるまで（～四十九歳）
二 会稽内史の時期（四十九歳～五十三歳）
三 会稽の逸民（五十三歳～五十九歳）

の三期に分けて上巻とし、書かれた時期のはつきりしないものについては、内容によつて分類し、

一 問好・時候の挨拶

- 二 諸事の連絡
三 家族・一族内の諸連絡
にまとめて下巻とした。

⑤佐藤利行「王羲之と五石散」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六五巻、二〇〇五年）を参照。また「五石散」については、魯迅「魏晋風度及文章与藥及酒之關係」（一九二七年）に詳しい。

⑥「聲」に関する内容の書翰としては、

天鼠膏、治耳聾。有驗否。有驗者、乃是要藥。（『右軍』一二）
天鼠膏は、耳聾を治すと。驗有りや否や。驗有ら者、乃ち是れ要藥なり。

「天鼠膏は、耳聾を治すと」ということですが、効き目があるでしょうか。もし 効き目があるとすれば、「大切な薬です」という内容のものがある。王弘の「十七帖述」には「凡そ鼠胆は能く耳聾を治す」とある。
⑦羲之の兄の籍之、その子の延期については、森野繁夫『王羲之伝論』（白帝社、一九九六年）を参照。

The Human Figure of Wang Xizhi in His Epistles

Toshiyuki SATO and Liu JINPENG

Wang Xizhi's epistles are considered to be personal documents that record his life, as well as an individual history of the aristocracy during the unquiet times of the Jin Dynasty. In addition, the epistles are valuable records describing the society of the time in a frank manner. Many facts can be learned from the epistles that have never been mentioned in historical books such as *Jin Shu* and *Shi Shuo Xin Yu*. In this paper, the authors utilize Wang Xizhi's epistles to explore the situation of his life during his hermit period.

